

#### 4. 畜産システム研究会第23回大会

##### テーマ：風土に根ざした畜産システムを考える

畜産システム研究会(会長 木村信熙教授)・家畜改良センター新冠牧場共同開催

日時:6月27日 於:家畜改良センター新冠牧場(静内町)

##### 1. 襟裳の風土と日本短角牛生産 (高橋祐之 短角王国高橋ファーム)

昆布漁などを営む漁業者が凶漁対策として明治28年頃から夏山冬里方式で肉牛を飼いはじめたのが襟裳の肉牛生産の始まり。えりも町海岸近くの700haの町営牧草地での放牧と昆布漁業との兼業により東北の牛飼いが飼っていた日本短角牛の生産。8戸の農家が1000頭していた時期から2.3戸へと減少。海風の強い海岸線の牧草地を活かす肉牛生産は脂肪交雑よりも赤肉の旨味が特徴の日本短角牛という信念のもとに高橋ファームは短角・黒毛のF1生産、繁殖は牧牛交配、飼養頭数は260頭。肉の格付けはB2中心、市場出荷はせず宅配方式の産直販売とレストラン経営で流通。消費者との交流を大事する活動で販売先を確保している。

##### 2. 生態系を活かした在来種による家畜生産 (秦 寛 北大静内研究牧場)

研究牧場の生態系を材料にした土地利用型の家畜生産モデルにおける物質循環についての研究成果の解説。日本短角種、ヘレフォードなどの肉用牛150頭、北海道和種馬80頭、軽種馬15頭が森林・放牧地・採草地など約450haに飼養されている。肉牛は2シーズン放牧で30ヵ月齢700kg出荷、枝肉格付けはB1,B2主体。家畜の飼料自給率81%でこの生態系における窒素投入量、持出量および循環量から推定される負荷量は17t/年であった。馬と牛の共存が森林・牧草地の生態系保護を達成させている。

##### 3. e-びーふの流通とその課題 (花房俊一 (株)マルハニチロ畜産)

輸入穀物飼料依存からの脱却を目指して地域の副産物飼料を活用した資源循環型牛肉生産を実践して生産された肉牛を認証する e-びーふの取り組みについての紹介と現状および今後の課題についての解説。副産物飼料の調製・給餌の労力負担が大きいこと、地域での副産物材料の供給量は大規模生産者の必要量を満たせないことなどから生産規模が小さいことなど、生産から販売までの過程に克服すべき課題が多いものの趣旨と発想は昨今の消費者の持つ環境保全や食の安全の意識に合致すると考えられ、この生産に合う品種の産肉・肉質の特徴に理解を訴えていく取り組みが必要な状況が紹介された。